

「日本人への提言」が問いかけるもの  
～NHK「視点・論点」を教材とした日本語学習～

Challenging the Japanese

～Process and evaluation of the mutual projectwork～

徳島大学留学生センター

Gehrtz 三隅友子

兵庫県立芦屋国際中等教育学校

山田久美子

ABSTRACT

This report is about learning activities by utilizing the daily NHK television commentary “Siten-Ronten”, where specialists discuss current problems in an easy to understand manner. The teacher rearranged the text concentrating on two goals: 1) to understand the topics 2) to learn different Japanese speech styles. Finally the learners chose topics, which they discussed in writing, expressing themselves strongly and freely. These compositions were shown to Japanese helpers, who gave written comments. We try to show what role the teacher could play and what can be achieved by incorporating native speakers and foreign learners in a mutual projectwork.

1 はじめに

留学生の生活において必要とされる日本語といえば、形式に関する知識はもとより、大学生活のさまざまな場面に即した運用力であるといえよう。大学、特に学部入学する者の多くが日本語学校で学習を終え、日本語の形式に関する知識は一定のレベルまで習得していると考えられる。しかし専門用語がほとんどを占める講義・演習から、生活言語が飛び交うアルバイトの現場に至るまで、それぞれに応じた語彙、表現そしてそれらを駆使する運用力を高めることは容易ではない。また留学生に必要とされる日本語とは、教師にとって予測のつかない専門領域の日本語であることも考えられる。しかも大学でのいわゆる「日本語」の授業時間は限られており、いかに効率のよい教育活動を実施できるかが、日本語教育に関わる者にとって共通の問題であろう。

本稿は、NHKのテレビ番組「視点・論点」を教材とした共通教育における日本語授業の実践をもとに、大学における日本語教育のあり方、さらには教育を実施する教師の役割を考察するものである。教師による生素材の教材化とその教材を用いた一年の授業は、学習者のニーズの顕在化と教師の設定した学習目標に変化をもたらした。更に、授業〈プロジェクトワーク〉の産物としての課題「日本

人への提言」を用いて、教室の外で日本人と交流するという展開へと広がった。この一連の活動を、まず学習者の評価を中心に生教材を用いた実践として概観し、そこから教師が行った教育実践について振り返り、最後に生素材を用いた大学での新たな日本語教育の可能性を考える。

#### 1. 受講生に必要な日本語とは

2004年度の徳島大学共通教育科目、日本語Ⅰ・Ⅱ（月曜 9/10 限及び金曜 7/8 限と 9/10 限）<sup>1</sup>を受講する学習者は、ほぼ全員が日本語能力試験1級合格レベルであり、日本語の形式よりも運用力を高める必要があった。また、受講生の4分の3が学部一年生ということもあり、大学入学による学習環境の変化に伴い、日本語学習の目標においても変化が必然的に起こることが予測できた。大学では、学習者が各自のニーズや希望に合わせて学習目標を見出し、それを実現するための学習内容や方法の取捨選択を通して自らの学習を企て、実行する力がより必要とされる。これを実践するには、学習者に「学習者オートノミー」（青木, 2001）という能力が備わっている必要がある。ただしこの能力は自発的に学習者に備わるものでは決してなく、学習者自身と彼らに関わる周りの存在が育てていくものであり、そのための環境整備は教師にとって大きな仕事でもある。

これらの点を踏まえ、筆者らは授業のコースデザインに際し、本活動が学習者に与える学習の可能性について以下の三つの問いかけを念頭に置いた。

留学生の日本語学習は日本人の外国語学習とは異なり、第二言語として生活と専門分野の学習に必要不可欠なものであるという前提をもとに、

##### 学習者自身が

Ⅰ 学習の目標と方法を確認できるようになるか

Ⅱ 学習内容を考えたとき、様々なものを日本語学習のリソースとすることができるか

Ⅲ 日本人との生活の中で、どのような運用力が必要なのかを認識し、そしてどのように日本人に働きかけることができるか

言い換えれば、これら三つを考える環境を、教師が学習者に設定しうるかということでもある。

## 2 「視点・論点」という素材

1で示した問いかけをもとに、既存の上級用教材ではなく、実際のTV番組「視点・論点」を素材に選んだ。「視点・論点」とは、NHK教育テレビで月～金曜日の22:50～23:00に放映される番組である。番組の内容は、現在国の内外で話題、問題となっているトピックを取り上げ、その分野の専門家が問題の状況を分析し、自らの立場で解決への提言をするというものである。これは、日本で生活している学習者に対し日本人と共時性のある話題を提供できると同時に、授業を通してその話題に対する理解が深められるという筆者らのねらいに相当する。

また番組の形式は、1人の専門家が約8分間、画面に向かってあるテーマについて話すという、基本的なスピーチのスタイルをとっている。これは、大学で受講する一般教養等の授業の形式と似ている。多くの専門家のスピーチスタイルを

<sup>1</sup> 日本語Ⅰ・Ⅱは筆者の2人が授業を担当した（月曜日は三隅、金曜日は山田）。

知ること、そして、専門家の解説を聞いて理解するための練習を積み、今後の大学生活に有益であろうと判断した。また、大学生になるとスピーチのような形式で自らの見解を発表する機会が増える。数多くのスピーチに触れることで、学習者が好みのスピーチスタイルを認識できれば、彼ら自身のスタイルというものを確立しやすくなるだろうと考えた。特に「視点・論点」に登場する話者はそれぞれ特徴があり、その多様性には枚挙に暇がない。話者の話す速度も、口調も、顔の表情も、さらには身につけている服装やアクセサリーに至るまで、スピーチの印象につながるということを、「視点・論点」は聴衆に伝えている。学習者にはこれらのポイントから理解の難易あるいは印象の良し悪しといったスタイルのあることをつかんでもらいたいと考えた。

以上を踏まえて、この番組の特徴から最初に設定した具体的な学習目標は、①時事問題の理解を深める、②様々な話者のスピーチスタイルを知る、③様々なスピーチスタイルを通して自らのスピーチに援用する、の三点であった。また刻々と変化する日本語の学習という点においては、これまで机上で学習してきた日本語を、「視点・論点」の生きた日本語を通してもう一度とらえなおすものと位置づけ、日本語運用力の向上を図るためには必要な活動であると考えた。

### 3 教材化

#### 3-1 テーマの選択

「視点・論点」の録画ビデオと録音カセットテープと教材化した資料を用いた。教材として選択する際には、「視点・論点」のテーマの適切性と話者のスピーチスタイルに重点を置いた。テーマは、数ある「視点・論点」の中から、さまざまな国からの学習者が共有しうるものを前提に教師が選んだ。また話者のスピーチスタイルは、前述の学習目標に沿うように、できるだけ多様性(男女・国籍・老若)を重んじて選択した。このようにして長期休暇の課題も含め、合計16のテーマを選んだ。実際に授業で取り上げた「視点・論点」のテーマは、表1のとおりである。

表1: 授業で扱った内容(「視点・論点」のテーマ)

<前期>

<後期>

話 者	テーマ	話 者	テーマ
千賀祐太郎	「観光立国ニッポンへの道」	松谷明彦	「1.29 ショックについて考える」
船曳建夫	「大学生と読書」	吉岡幸雄	「錦秋」
松岡正剛	「ITと読書」	池本美香	「少子化時代の子育て」
服部公一	「唱歌・童謡・子どもの歌」	小杉礼子	「増加する NEET」
佐藤綾子	「日本人の自己表現」	中西進	「成人の日について」
B・パートン	「歴史学から見た日本の閉鎖性」	K・日地谷	「減速の美学」
駒井 洋	「難民にやさしい国」	(中村佳子	「情報・知識・知恵」)
舟崎克彦	「孤独を考える」	(アグネス・チャン	「EU 拡大と人身売買」)

※( )のテーマは長期休暇の課題であり、授業全体で扱わなかったテーマである。

#### 3-2 教材への加工

まず、「視点・論点」の番組内容をすべて文字化し、スクリプトを作成した。このスクリプトをもとに語彙シートや内容理解を深めるためのさまざまなタスクシート、さらには参考資料を作成した。

語彙シートは、事前学習用に用いることが多かったが、ときには語彙をすべてひらがな表記にしておいて、授業中、「視点・論点」の文脈に従い漢字に改めさせるなど、漢字の言葉と音の確認作業に用いることもあった。

タスクシートは、「視点・論点」を視聴することで達成できるものから、学習者の周りにいる日本人にインタビュー調査をしなければならないものまで準備した。なお、この授業における練習活動を全体的にタスク練習と位置づけた。タスク練習とは、聴解あるいは読解などで得た情報をもとに、何らかの課題や仕事を果たす作業を行う活動である。これは、教室内での聴解や読解の練習を行動と結びつけることで、できるだけ現実のコミュニケーションの形態に近づけるための教室活動として扱われるものである(田中,1988)。さまざまな大学生活の場面に対応できる日本語運用力の向上を必要とする学習者に対し、現実のコミュニケーションにつながる授業を提供するには、タスク練習を基にした活動が効果的であると判断した。

参考資料は、必要に応じて内容に関連した新聞記事、書籍などから一部を抜粋した。

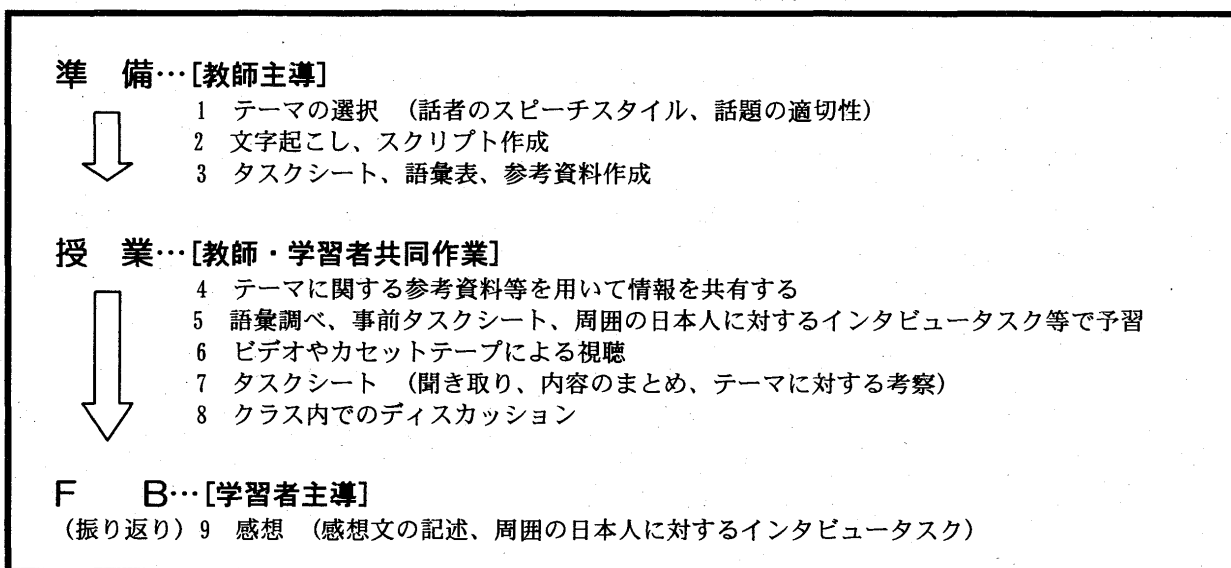
## 4 授業方法

### 4-1 基本的な授業の流れ

前述のテーマに沿って授業を展開したが、ひとつのテーマにつき費やした時間は、短いもので2コマ、長いものでは8コマ分をかけた。基本的な授業の流れは、テーマによって若干の違いはあるが次のとおりである。

まず、導入段階として、参考資料等を用いてテーマに関する情報を共有する。その後、語彙表や事前タスクシートなどを渡し、学習者に予習を求めた。周囲の日本人に対するインタビュータスクが事前学習の一端を担うテーマもあった。続いて「視点・論点」を視聴し、タスクシートを用いて活動を行うのだが、ビデオは最初に全体を通して見るときに用い、カセットテープはタスク活動をする際に用いるのが主であった。ここでのタスクシートは大きく分けて三つの種類に分けられる。一つめは、専門用語や外来語、スピーチでの独特の言い回しや慣用表現などの聞き取りの練習に焦点を当てたもの、二つめは内容理解に重点をおいたもの、三つめはテーマに対する考察を促すものである。タスク活動終了後、あるいはタスク活動中、クラス内でテーマに対してディスカッションの場をもった。クラスの規模が小さいということと、学習者同士の仲間意識ができているということもあり、テーマとテーマに関する「視点・論点」の専門家の意見に対して、毎回活発な意見交換が行われた。最後に振り返りとして、学習者に感想文を課した。また全テーマではないが、周囲の日本人に対するインタビュータスクを課す場合もあった。それらは、新しいテーマに移行する前に、フィードバックとして用いられ、クラス内の全員で共有した。以上の授業の方法と、準備段階の教材化の過程を含めた授業の一連の流れは、図1である。

図1:「視点・論点」ビデオを使った授業の流れ



#### 4-2 授業例:「1.29 ショックについて考える」

実際に行った授業のうち、「1.29 ショックについて考える」を例にとり、図1をもとに授業の流れを示す(スクリプト、語彙表、タスクシートは参考資料①～③)。

日本の2003年度の出生率が、戦後最低の1.29にまで下がり、少子化問題が国の重要課題となった。このテーマは日本に限らず、学習者が自分の出身国にあてはめても考えられる内容であろうことから選択した(1:図中番号、以下同様)。今回は、1.29という数字がなぜ問題なのか、テーマに関する新聞記事を参考資料として、事前学習の時間を設けた。また、「視点・論点」で用いられる言葉に専門用語が多いため、自宅学習用に語彙表を準備し、授業で用いるタスクシートは言葉の聞き取りを重視したものを準備した(2、3:参考資料②、③、④)。

このテーマは約7コマ、4週に渡って授業を行った。まず「少子化」、「高齢化」という言葉に対し、学習者がそれぞれの考えを述べ合うことから始めた。新聞記事の読解、日本人に対するインタビュータスクは、1.29という数字の社会問題性と現実を、学習者が知る手がかりとなった(4、5)。テーマに関する一定の知識を共有したところで、「視点・論点」の視聴である。まずビデオを最初から最後まで一通り見て、内容の理解度やスピーチ話者の印象などを確認する。その後カセットテープを用い、タスクシートに沿って練習を行った。この授業では、言葉を正確に聞き取る練習をはじめ、内容の要約も練習活動に取り入れた(6、7:参考資料③)。そして、一連の活動を通してテーマに関する専門家の主張を理解した学習者が、それぞれの感想や意見を述べあった(8)。

このテーマのFB(フィードバック)としては、「視点・論点」の専門家が提議した問題の解決策を学習者に考えさせることを通して行った。後に授業で数例をとりあげ、クラス全員にどう思うか意見を求めたところでこのテーマの学習を終えた(9)。

## 5 授業の評価

### 5-1 学習者による評価

日本語Ⅰ・Ⅱを受講した学習者は、計18名で、出身は中国が11名、韓国3名、マレーシア、ベトナム、インドネシア各1名であった。学習者からは、前期後期に実施した授業評価（①授業内容について、②授業の方法について、③その他を自由に記述）と、後期終了後に行われたインタビューに評価及びコメントを得ている。図1の流れに従い、学習者の声をもとに、評価をまとめたものが表2である。

表2：活動に対する学習者の評価

		学習者の声 肯定評価…標準 / 否定評価(改善案)…斜体
準備	1)	・「よい素材だ」・「外国人にとって日本を理解しやすい」・「現代社会に起こっている問題についていろいろ考えられたからよかった」 ・「ちょっと退屈だった」・「もっと大学生と関連があるテーマにしてもらいたい」 ・「一つのテーマが長すぎた」・「似たようなテーマが長く続いた」・「日本現在の問題がよく取り上げられているが、おもしろくない」
	2)	「この授業ではビデオを見るだけではなく、プリントも配ったから理解できた」
	3)	「専門的な言葉の勉強を、語彙表にまとめてくれたのが助かった」
授業	4)	「新しい課題に入る前に興味深い話や例を出してくれたので、内容を覚えることに役に立った」
	5)	「字をいっぱい間違っていたことに先生の赤ペンで気づいた、今は漢字も気をつけている、辞書をひくようになった」
	6)	・「いつもビデオばかりみていたのであまり興味が持てなかった」・「もっと日常的なテブをつかったらいいと思う」・「日本のドラマや映画についても希望する」
	7)	・「留学生の聴く能力を上げることに重視していると思う」・「テキストの聴解よりは、テレビの専門家の言葉は普通の人の感じで、聴解の練習になった」 ・「ビデオ授業の方法は改善すべきだと思う」・「聞き取りの時間が長すぎた」・「聞き取りが疲れた」・「聞き取りの課題は何度も繰り返せばできるが、内容をまとめるのは本当に大変だった」 ・「テブを聴くより、ディスカッションの方が気力が出る」
F B	8)	・「一人ひとりの意見が聞けたし、自分の意見も言えたのでおもしろかった」 ・「もう少し議論する時間があれば良いかと思う」
	9)	・「日本人とのもっともよいインタビューの方法を学べた」・「課題がこれ以上増えたら負担になる」 ・「インタビューする課題がもっと多かったらよかった」
活動全体		・「授業の方法がよかった」・「新しい授業方法だった」・「すごく楽しかった、みんなが友達のようにうまく授業を進めるとい感じでたまに時間が足りなくなってしまう」・「みんな気楽で勉強できるので自分は成長したと思う」・「他の国の留学生と知り合ったし、日本語だけでなく、日本の人々も知り得た」・「この授業で覚えた単語が別の授業でも出たので役に立った」・「ビデオを見たおかげでニュース番組を見るようになった」・「ここは日本語学校ではなく大学だから、単純にテキストを勉強するのは意味がない。試験のためではなくて自分の日本語のレベルを高めるために勉強している。このような日本語授業はよかった」 ・「いろいろなことについて話したかったが、ビデオをみなければならなかったのが残念だった」

<p>・「9/10 限という授業の時間がとても遅くて、授業に合わないと思う、学生も疲れるから、授業もつまらなくなった」・「ひとつの話題に関する発表会をしてほしい」・「ひとつのテーマからいろいろな視点のスピーチを書いて、それぞれの主張について議論するスタイルはどうか？」</p>
--

## 5-2 学習者評価からの考察

活動に対する学習者の評価(表2)をもとに教師の評価(考察)を進める。

教材化したもののうち語彙表やタスクシートは、学習者に対し授業内容の理解を促す一定の役割を果たしたものと見なされ、否定評価が見られなかった。

最も肯定、否定評価が分かれたのが、テーマ選択に関するものである。「外国人にとって日本を理解しやすい」、「現代社会に起こっている問題についていろいろ考えられる」機会となった「よい素材」とであると評価される一方で、「おもしろくない」、「もっと大学生に関連のあるテーマがいい」とも評価されている。扱ったテーマ(表1)は、筆者らが2人で学部学生に必要なものと推測して選んだものであり、学習者のテーマに関するニーズ調査は一度も行わなかった。教材のテーマ選択時に学習者側の視点を重視していれば、より彼らの日常生活に即した教材が作成できたはずである。限られた時間内で生素材を教材化する過程は決して容易なものではないが、今回のように、学習者のコミュニケーション運用力の向上を前提にした教材を作成するのであれば、テーマ選択の教師・学習者間の双方向性は必要であっただろう。今後の改善点の一つである。

授業方法に関しては、全体的に見ると「よかった」という好意的な評価が見られる。また事前学習、タスクシートに対する筆者らのフィードバックが有効だったと評価する学習者もいる。しかし、「視点・論点」視聴の方法に関していえば、「聞き取りの時間が長すぎた」、「疲れた」といった否定評価が目立つ。これに対し、「テープを聞くよりディスカッション」の方が意欲が高まってよいという意見が代表するように、ディスカッションに関しては肯定評価しか見当たらない。どの学習者も授業を通して共有したテーマについて、クラス内で意見を交換する活動に意義を見出している。一方、聞き取りの練習に否定評価が集まったのは、ディスカッションよりも聞き取り練習の時間が圧倒的に多かったからである。ただし、生の日本語を聞き取る聴解の練習になったという一定の評価が得られていることから、活動自体を見直すというよりは、内容理解のための聞き取りの時間と、自分の意見を口頭で述べる時間のバランスが問題であるということができる。この点について検討を重ねる必要があるということであろう。

## 6 最終課題「日本人への提言」

### 6-1 「日本人への提言」

前述5までが、「視点・論点」を用いた日本語の授業の実践と考察であった。ここから教室から発展させた形となった活動に稿を進める。

「視点・論点」を用いた本活動の最終課題として、学習者は「日本人への提言」をまとめた。一年を通した授業を進めるうちに、授業の締めくくりとしてあるいは、単位を出すための資料としての最終課題ではないものを教師は考えた。それは、最初の問いかけにあるように、本授業が学習者に自らの日本語運用力が日本社会に十分通用することを確認させるとともに、何のために日本語を学ぶかを意

識することを促す必要があったからである。そこで授業中に出された、より多くの日本人との意見交換を求める声をもとにこの「日本人への提言」作成を実施した(資料⑤)。これは、学習者が既習テーマより各自選び、授業を通して得た知識や見解さらに大学生活を送る中で考えたことを文章にしてまとめたものである。学習者には、①提言②日本人に聞いてみたいこと(一文で)を1000字前後(A4用紙に1枚程度)に収めることと、必ず提言の形をとることを要求した。提言の形をとる意味は、現状を踏まえこうすれば問題は解決が図れる、あるいは改善されるのではという意見を日本人に投げかける必要があること、単なる作文ではなくこれらを教師以外の日本人が読みそれに対してのコメントが返ってくることを説明した。当初、この日本人との意見交換をするという活動が理解できない者(これまでの作文は日本語教師が見て評価するのみであった)も見られたが、返答をもらうためにはどのように書かなければならないかを確認する過程から理解が得られた。以下は18名の提言のテーマと聞いてみたいことそして、日本人からのコメント数である(資料⑥)。

#### 6-2 「日本人への提言」に対する日本人のコメント

まとめられた提言は約60名の日本人協力者(地域の日本語ボランティア、日本語教師養成講座受講者、学校教師)に提示し、コメントを得た。コメントに依頼した形式は、①提言に関してのコメント②聞いてみたいことの返答③文章を読んだ自由な感想である。日本人のコメントには個人差はあるが留学生の論理的な文章が書けているという日本語力と、社会問題に対しての鋭い視点や考察に感心したことをおおむね評価している(資料⑦)。

日本人にコメントを依頼する際、セミナー等で集まった場または職場で、まず本活動の説明を行った。そこで学習者(月曜あるいは金曜クラスの二つに分けた)の提言を配布し、まず読んでもらい、そしてその中の一つを選び、その提言に対して意見を書いてもらうという方法をとった。「日本人同士でも話をしない」テーマに戸惑いながらも、「久しぶりに真剣にコメントを書いた」という声もあった。「時間がかかった」のは確かだが、日本人側にも刺激を与える活動だったと言える(この分析に関しては別稿に譲る)。そして、14名の原稿と60名のコメントを冊子にして学習者及び可能な限り日本人に対しても配布を行った。

ある学習者の提言に寄せられたコメントの例を挙げると以下のようなものである。学習者Aには、9名の日本人からのコメントがあった。Aはその提言に「自分が日本で出会った日本人が目標を持って努力している姿と、中国での学歴の重要性を述べながら、近年報道されている日本での成人式の問題に触れ、いっそ日本の成人を30歳にしてはどうですか」という提案をしていて、非常に簡潔な意見であったことから、受け手の日本人にも自分の考えを述べやすいものであった。9名のうち「成人=30歳案」に賛成した人は2名、反対する人の中の3名は、中国と同じ18歳にして成人の自覚を促すべきだとし、残りの4名は20歳にもいろいろな人がいること、一部のマスコミの加熱報道が誤った認識を私たちに与えていることを述べ、成人を20歳のままでよいという意見を述べている。学習者Aの投げかけが、9名の日本人に考えるきっかけを与えていること、その答えが9人9様であり、それぞれがAに対して提言に関してさらに確認したいこと、また中国での



事情をもっと知りたいこと、の記述から、ここからさらに議論が続くことが予想される。

そして、提言以外の感想として、A が使った「中国では学歴と生活の関係は、水と魚の関係にある」という表現が効果的という正の評価をした人が2名、題「学歴と生活と独立」と内容がかみ合っていないという指摘をした人、日本人の自分は中国の若者の状況を知らないことを実感した、A が日本人と良い関係を作っていることを文章から感じた、報道以外にいろいろな世代の日本人とつきあってさらに提言を再検討してほしい等の意見もあった。いずれも真剣にAに対して自らの考えを述べていることがうかがえる。

## 7 「日本人への提言」の新たな展開

### 7-1 「国際化講座～徳島県の国際化を進めるために～」での使用

その後、冊子を読んだ学習者から「同じテーマでコメントをくれた人と実際に話し合えればもっと広がるし、深まる」との意見が、そして日本人からも「この意見を書いた人自身とその人の国のことをもっと知りたい」という声が出た。提言でテーマを共有すること、言い換えれば、学習者と日本人が同じ問題への見解に対して互いに関心を持つことで、さらに両者のつながりが広がる可能性を感じた。今回の学習者とコメントをくれた日本人との討論は実現できないものの、日本人への提言を作成した学習者にそれらを使って実際に日本人との討論をする場を持つ場を設定した。それは徳島県自治研修センターとの協力で実施した徳島大学セミナー「国際化講座～徳島県の国際化を進めるために～」(2005年9月30日に徳島大学にて実施)である。このセミナーは県の様々な部署からの職員約30名に対して、①徳島大学の留学生との討論 ②異文化コミュニケーションに関する講義 ③「国際化と人間の解放」言語学者田中克彦氏講演 ④全体の振り返りという内容を一日かけて行い、その中の①の討論部分で「日本人への提言」を使用した。

日本語Ⅰ・Ⅱの授業を受講した18名の学生のうち7名が当日参加し、留学生1名を核とした4-5名のグループを作り、簡単な自己紹介の後、日本人への提言を使って話し合いを進めた。まず書かれた提言を作者の前で日本人が読み、それに対しての留学生による補足、さらに提言に対する日本人の答えという形で行われた。参加者らは、目の前にいる学生の提言、その提言に対する他の日本人の意見、そして自らの意見を述べるということが要求された。

### 7-2 参加者の評価

それぞれに対して採ったアンケートの記述から分析を進める。学生は、話し合いの活動そのものに対しては7名が(大変うまくいった3名、うまくいった4名)うまくいったとしている。そして、「あなたの提言は受け入れられましたか」の質問には、6名がおおむね受け入れられた、1名が「受け入れてくださった人も、受け入れてくださらなかった人もいました(原文ママ)」と書いている。一方、日本人は、「留学生とのセッションに関して、活動に参加できたか」の問いには、大変よく4名、よく11名、普通3名、まあまあ2名の回答を得た。よく参加できた理由として、・留学生の日本語力が高くまた十分に日本を理解していたこと、・

留学生側から明確な話し合いのポイントが提示されていたこと、・このような留学生との話し合いの機会を有効に利用したかったこと等が、「普通及びまあまあ」の理由としては、・もう少し個人的な話をしたかったこと、・話し合いの時間が短かったこと・グループの中で一番若かったので発言を控えた、が挙げられた。また満足度に関しては、大変満足6名、とても6名、普通7名、まあまあ2名の回答を得た。満足した理由として、・外国人とこのように内容のある話をするのが初めてだった(7名)ことをふまえ、異文化の表現と思考の一面が理解できた、マスコミや書物からの情報と違って新鮮だったことを述べている。また、満足度の低い理由としては、時間が短すぎて(4名)本音が出せなかった(2名)というものがあった。

さらに、留学生とのセッションの中で、22名中12名(2名が複数を選んだ)が「日本人への提言を基にした話し合い」を一番印象に残った活動として挙げた。理由としては、留学生が「日本人のことをよく観察しており、考え方が日本人よりしっかりしている」、「少子化と年金問題をリンクさせるなどの日本の現状をより理解して話がわかりやすく議論しやすかったから」「『親を扶養するのは当たり前』という考えがすばらしい。『日本人はあいまい』という意見に考えさせられました」「自分にとって新しいことを知ることができた」といった内容に関するもの、「共通の言語でしゃべれば意志は通じると思いました」「同じ人間としての本質は同じだったように感じ、むしろ自分よりも素直なところが感じられました」のように、日本語で対話することの楽しさを理由としたものもあった。

一日の研修の中で、前半2時間を留学生とのセッション、午後からの後半3時間を講義と講演と設定したことにより、研修全体の評価として従来の研修にありがちな受身的なものでなく、自らの意見を述べなければならないこともあり、「主体的に取り組めた」という感想を得た。

### 7-3 「日本人への提言」の役割

この研修における「日本人への提言」の役割は、留学生にとっては「日本語」の授業を通して学習して得た知識と作成した「提言」が日本人にどのような反応が得られるのかを確認するものとなった。また、日本人(徳島県職員)にとっては、大学で学ぶ外国人学生と話すという機会から、彼らの日本語力、そしてどのように日本を認識しているのか、そして何を目的に留学をしているのかという、留学生の存在そのものを知り得たといえる。「国際化講座」を自ら受けようとして集まった参加者の学ぼうとする意識、また自分の職域の中での国際化を考えようとする意識の高さを考えても、非常に高いレベルでの理解が進んだセッションであったと考える。

このセッションに至るまでの一連の過程は、学習者に自らの日本語運用力が日本社会に十分通用することを確認させるとともに、何のために日本語を学ぶかを意識することも促している。また日本人側にとっては、時事問題について学習者が違った視点から、その問題に対して自分の意見を持っていること、そしてさらに議論ができる、という認識を与えたことになる。

## 8 三つの問いかけに答えて

ここで改めて、当初、筆者らが念頭においた三つの問いかけを考えたい。問いかけの1において、日本語学習が生活と専門分野の学習に必要なものという認識のもと、学習者自身が目標と方法を確認できるようになるかを設定した。「この授業で覚えた単語が別の授業でも出たので役に立った」という学習者にとっては、日本語学習と専門分野の学習のつながりを実感できたであろう。実感と結果を伴った専門学習と日本語学習の必要不可欠な関係性を認識すれば、学習者も自身の日本語学習の目標と方法を漠然としたものから明確なものへ絞ることが容易になる。「日本語だけでなく、日本の人々も知り得た」という学習者も、自身が豊かに日本で生活するうえで、日本語学習がいかに重要な部分を占めているか、改めて確認できたに違いない。

「ビデオを見たおかげでニュース番組を見るようになった」と述べた学習者は、授業のビデオ視聴を通してニュースへの関心が高まり、ニュース番組を見る習慣がついた。すなわち、授業で教材として接したことをきっかけに、ニュース番組が学習から生活に必要なものとなったといえる。時事問題を授業で扱うということは、授業にリアリティを生み出す。授業で取り扱っていたテーマが、そのままテレビや新聞、インターネット記事で映し出されれば、学習者も自然とそちらに目が向くであろう。

IIの日本語学習リソースの問いかけに対しては、「視点・論点」の内容がテーマや話し手によってその理解度が異なるということ、またそれ以外に使用した新聞や本、さらにインタビューや討論による日本人との会話を通し、既存の教材ではできない様々な学習とその方法を学習者は学んでいった。自分が実際に経験する場で日本語運用力を向上させるには、自分の周りのレアリア（実物）を使っていくしかないと認識されたといえる。今後はより意識化を進めるために、自らの周りの素材を書き並べ、学習素材の概念地図を作成するという方法を、ストラテジートレーニングの一環として取り入れると、さらに有効かと思われる。

IIIは、日本人との生活の中で、学習者にとってこれからどのような運用力が必要で、どのように日本人へ働きかけるか、というものだった。当初、学習者に必要な運用力を推測し、その基盤づくりを目指した。しかし学習者は先にも述べたとおり、「視点・論点」で使われた日本語の表現やその内容を、受動的に理解するだけでは満足しなかった。学習者は、テーマに関する自らの意見を教室内で述べ、それをもとにインタビュータスク等で周囲の日本人と意見交換を重ねた。そして最終課題の「日本人への提言」の活動は学習者に、日本語を運用する活動に対して自信と興味を持たせ、やがては彼らの生きたコミュニケーションの実践に対する意欲の高まりへと続いていった。この一連の流れは、学習者が自分たちで計画をたて、実際に教室外で情報を収集し、その作業の結果を一つの作品にまとめあげるプロジェクトワークである(田中ら,1988)。それほど学習者が主体的にこの授業に関わり始めたということでもある。この活動における学習者の変化に伴い、教師もまた、この授業の果たす役割に対する意識的变化が芽生えた。本稿6, 7で述べた内容こそが、学習者がその日本語力を使って日本人へどのように働きかけることができるか、を図る具体的な活動として提示できたと考える。

おすびにかえて ～大学の日本語教育が目指すもの～

2004年4月から翌年2月までの日本語の授業さらに「日本人への提言」を作成して半年が経過した中で本活動を振り返り、いわゆる上級の日本語教育の可能性について述べる。

まずは、いわゆるコースデザインという「学習目標の設定→学習者のニーズとレディネスの調査及び把握→学習内容→学習の素材→学習方法→実施（毎回の授業、半期という複数回の授業）→評価→次のコースデザインへ」一連の流れの中で、学習者を含めた現状を把握することが必要であろう。学習者は、日本語の学習を最大の目的としていた日本語学校から、実際に使う場である大学へという学習環境の大きな変化の中に存在する。そしてこれまでの目標も、日本語能力試験及び日本留学試験で高得点を獲得することから次の目標へと向かう。これまでの学習内容、方法では対応できないことを学習者が意識することが必要なことはいうまでもない。

また、大学教育の枠組みの中では、時間、方法、内容の中に制限を持つ。それゆえ教師は学習者に対して、自らが設定した教育活動の中で学習者を評価する必要がある。それは平常の出席点、取り組み度、成果物（作文や発表）を評価し点数化し、単位を与えるという活動である。

筆者らは、上記の評価を狭義の評価と考え、大学における日本語教育はより広い意味での評価を目指すべきと考える。それは、この教育活動に関わる者すべてが評価の活動に関わることで、新しい意味での「日本語教育」につながるとする。

この評価の点からは、教授者の評価はもちろん、学習者側にも、日本語の使い手としての自己の学習に責任を持つという意味での自己評価が必要であろう。学習者が、自らの取り組みはどうであったか、この活動を通して自分は何ができるようになったのか、本稿で設定した教師の問いかけが学習者自身に直接つきつけてもよかったのではないだろうか。今回の「日本人への提言」は、コメントを書いた日本人も、討議に参加した県の職員も評価者となっているといえる。日本語話者としての評価者の役割は非常に重要である。学習者が自分の日本語運用力を適当に自己評価できるように、彼らの日本語を教室外の日本語話者からも評価してもらえるような環境を整えれば理想である。

最後に、日本語教師は知っていることを教える存在だけではなく、上述のような学習環境の場を設定する存在であることも確認できよう。従来型の教師がまず自らが学び、得たその知識を目の前の学習者に注入するという役割から、学習者と教師が共に目の前のリソースを利用しながら学習していくという、教師が促進者やコーチのような役割をする活動もあろう。

さらに、日本語を学習する中で学習者と地域の日本人を結びつける役割もまた、生活環境の整備という点からも必要である。学習者と同時に学習者を受け入れる社会の日本人の状況も考え、地域社会における共存をいかに図るかも日本語教師の役割かもしれない。それには学習者の状況把握とともに、学習者が生活する地域の状況を把握することも求められる。

最終的に本活動は、学習の場を教室から教室外へと拡大した。これを可能にしたのもまた、教室内だけでなく教室外でも共時性のある時事問題を扱った生素材を用いた授業だったからに他ならない。日本語授業に生素材を用いるには、多くの場合それを教材化する必要がある。教師にとって、その作業は確かに大変なも

のである。しかし、留学生の生活に即した日本語運用力に焦点をあてた日本語学習を考えると、この活動の学習者の評価を見る限り、生素材使用は有効である。とくに授業のもたらすリアリティーが教室外でも通用するという実感は、学習者が自身の表現で周囲の日本人に働きかける機会を広げるであろう。

大学における生素材を用いた日本語教育の可能性は、まだ計り知れない。今後もどのような可能性があるか、研究を重ねる必要がある。今回は教師二人が、実践を重ねる中で互いの授業を振り返りさらに話し合う場を持ち、また今回のように目標の拡大を図りながら、自らのネットワークを広げつつ新たな試みができることが成果であったと考える。この活動は学習者のニーズの顕在化に際し、教師自らも様々な意味で「変わる」ことの意義を認識したといえる。

#### 【参考文献】

- 青木直子 (2001) 「教師の役割」 青木直子・尾崎明人・土岐哲[編] 『日本語教育学を学ぶ人のために』 世界創思社 182-197 頁
- 田中望 (1988) 『日本語教育の方法－コース・デザインの実際－』 大修館書店
- 田中幸子・猪崎保子・工藤節子 (1988) 『コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクトワーク』 凡人社

付記：本稿は、はじめに、8及びおすびにかえては山田、三隅の両者が、1～5を山田が、6～7を三隅が主に執筆した。

## 参考資料 ① 教材スクリプト例

### NHK 視点論点「1. 29ショックについて考える」

松谷明彦 2004.6.29 放送

こんばんは。先日、厚生労働省から2003年の出生率、すなわち一人の女性が一生の間に産む子供の数が、1.29に低下したとの発表がありました。過去最低であった、一昨年の1.32をさらに更新したわけですが、それを受けて、効果的な少子化対策。つまり出生率を向上させるための対策を求める声が一段と強まっているようです。そこで、今日は、「そうした出生率の低下を我々としてはどう受け止めるべきなのか」、ということについて話したいと思います。

出生率の低下を、経済や財政、年金といった視点から考えれば、それは、将来働き手が減少し、同時に国民の」といいますが、労働力人口の減少は、経済成長にとっては、大きなマイナス要因です。また、働き手の割合を「労働力率」といいますが、労働力率の低下は、現在問題となっている年金収支や、財政収支を一層悪化させることになります。したがって、「早急に少子化対策を講じて出生率の向上を図るべきだ」という主張についても、それなりにうなずけるところはあります。

しかし、私は出生率の低下にこだわりすぎるのも問題だと考えます。というのは、現在の日本においては人口の高齢化という、もっと大きな問題が急速に進行しているからです。これからの2・30年間、日本では高齢者が急速に増加し、労働力人口が急速に減少します。先ほど、「出生率が低下すれば、将来の労働力人口が減少する」と言いましたが、これからの2・30年間における労働力人口の減少は、それとは比較にならないほど、急速かつ大幅なもののなのです。経済に対する影響もはるかに大きく、日本経済は成長率の低下に留まらず、継続的なマイナス成長、つまり右肩下がりの経済とならざるを得ないでしょう。労働力人口の減少があまりにも急速であるために、省力化などの技術の進歩をもってしても、とてもカバーしきれないというわけです。

年金に対しても、その影響は甚大です。先般の年金制度改革については、大きな波紋を呼んでいます。私が試算したところでは、今後の大幅な労働力人口の減少によって、さらなる給付や、負担の調整を迫られることになるものと考えられます。そして、問題は、経済や年金、財政における、そうした激変に対する準備が、現在のところほとんど進んでいないところにあります。

先ほど、出生率の低下にこだわりすぎるもの問題だと言いましたが、それは出生率の低下に目を奪われて、こうした、足元にある問題をきちんと認識していないのではないかと、と思われるからです。さらにいえば、出生率が上昇しさえすれば、それらの問題は解決するだろうと、考えてはいないでしょうか。そうだとすれば、我々是对応を誤ることになりかねません。仮に、出生率が上昇しても、その子供達が成長して労働力になるには、2・30年かかります。日本が現に直面している問題は、何も解決されないのです。

では、なぜ、この2・30年間において、高齢者が急速に増加し、同時に労働力人口が急速に減少するのでしょうか。その理由は、戦後のベビーブームと、その後に行われた大規模な産児制限にあります。つまり、高齢者が急増するのは、ベビーブームの世代、いわゆる団塊の世代が年をとって高齢者となるためです。そして、労働力人口が急変するのは、優生保護法などによる産児制限の行われた世代が、変わって労働力の中核となるためです。そして、そうした高齢者の増加と労働力人口の減少が、いかに急速なものであろうと、われわれはその速度を変えることはできません。これから、生まれてくる人の問題ではなく、現にこの世に存在している人々の年齢構成からくる問題だからです。したがって、日本が直面する問題は、対処療法ではとても解決できな

いでしょう。高齢社会をみすえた、経済システム。社会システムの抜本的な再構築こそが求められているのです。

企業経営においては、これまでの薄利多売的な経営手法から、利益率を基本とした新たな経営システムへ脱皮する必要があるでしょう。財政についていえば、ゆとりの少なくなる経済のもとでは、増税は経済を一層縮小させることになります。増税に頼らず、労働の減少にみあって財政支出が縮小するようなシステム、すみやかに転換すべきだと言えるでしょう。

年金改革にしても、労働者から高齢者の所得の移転という現行のシステムだけに固執するのではなく、たとえば家賃の低い公的な賃貸住宅を大量に供給するなど、いわば、社会的なストックの活用をあわせて考えるといった、発想の転換が必要となります。その賃貸住宅は、南世代にも渡って機能するわけですから、財政と年金をあわせたところでは、国民の負担はむしろ小さくなると考えられます。

そして、そうした新たなシステムが開く未来は、決して暗い未来ではありません。経済は縮小しますが、人口も減少します。私の試算では、一人あたりの国民所得は、現在の水準が維持されます。日本の一人あたり国民所得は、現時点で世界の最高水準にあるのですから、今後とも日本国民が世界有数の豊かな国民であることにはかわりはないのです。

出生率の低下を、軽視するわけではありませんが、その影響が現れるのは、これから2・30年先のことです。しかも、先ほど言いましたように、出生率の低下による、労働力人口の減少は、これから団塊の世代が高齢化することによる労働力人口の減少に比べれば、ずっと小幅なものです。したがって、それまでに今述べたような、経済社会システムの再構築が進んでいれば、出生率の低下がもたらす問題への対応ははるかに容易なものになると言えるでしょう。

ただし、システムの再構築はさまざまな既得権を消滅させることになります。少子化対策の緊急性を主張する根底には、だから現在の経済社会システムを変えたくない、つまりは既得権を維持したい、という気持ちがありはしないでしょうか。高齢化と異なり、少子化はまだ変化する余地があります。それを奇禍として少子化対策を主張している面があるとすれば、それはシステムの再構築にとって障害となりかねません。

この点は、外国人労働者の活用という主張とも相通ずるところがあると考えます。仮に、外国人労働者の活用によって、現在の労働力水準を維持しようとするれば、今後の24年間で2千400万人もの外国人労働者が必要となります。そのときの、外国人比率は、20%以上と先進国にはまったく例をみない高さに達します。したがって、外国人労働者の活用によっても日本経済の縮小と、それに対応したシステムの再構築を避けることはできないと考えるべきでしょう。それだけ、今後の高齢化の進展は著しいのです。わずかな出生率の変化に一喜一憂することなく、足元にある問題を正確に認識し、冷静な対処をもって未来を開くことを望みたいと思います。

## 参考資料 ② 事前学習—新聞読解用プリント—

### [ウォーミングアップ]

- 「少子化」という言葉からイメージすることは？
- あなたの国で「少子化」という言葉は話題になっていますか？  
「高齢化」

### [新聞記事から]

日本の 2003 年度の出生率は( )→戦後最低の記録

この 10 年間、少子化対策を行ってきたが、

- (① )の低下は止まらない。その背景には(② )だけでなく、  
(③ )、(④ )の進行がある。

- ① [ ]の変化に大きく関係。生まれる子どもが減り続ければ、社会保障制度の[ ]の比率が下がり、制度の現状維持が難しくなる。
- ②、③ 85 年以降、20～30 代の未婚率は男女ともに上昇を続けている。40 歳以上の未婚者人口も増え続けている。→結婚と出産の[ ]だけでなく、[ ]化現象起きている。
- ④ ②、③に加えて[ ]現象が広がる  
→この 10 年間、政府は少子化対策として育児休業制度や保育所の整備を進めてきたが、まだ十分ではない。[ ]そろって子育てできる生活にほど遠い。



日本の現状は、ドイツやイタリアとともに[ ]と分類される。それは同時に[ ]が進むことを意味する。このままでは、年金、医療、介護などで[ ]と[ ]のバランスが崩れる危険に直面している。

## 参考資料 ③ 事前学習—語彙調べプリント—

### 1.29 ショックについて考える

- ことばを調べておきましょう。

#### [II]

- ・ 早急に
- ・ 対策を講じる
- ・ 向上を図る

#### [III]

- ・ 右肩下がり
- ・ カバー
- ・ 甚大
- ・ 波紋を呼ぶ
- ・ 早晩
- ・ ～ことになりかねません

#### [IV]

- ・ 抜本的
- ・ 再構築

#### [V]

- ・ 薄利多売
- ・ 脱皮
- ・ ストック

#### [VI]

- ・ 既得権
- ・ 奇禍
- ・ 相通ずる
- ・ 著しい
- ・ 一喜一憂
- ・ 対処



次の表現を友達に聞いたり、インターネットで調べましょう。

- 厚生労働省
- ベビーブーム
- 団塊の世代
- 優生保護法



次の質問を日本人にしてみよう。

「最近、子どもが減っています。」

そのことについて、何か考え



## 参考資料 ④ 授業用タスクシート

○テープを聞いて、( )にことばを書きましょう。

[Ⅰ]

2003 年の出生率は 1.29

出生率=( )

効果的な少子化対策=( )

↓

「そうした出生率の低下を我々としてはどう受け止めるべきなのか」

問Ⅰ あなたは出生率の低下をどう受け止めていますか？

[Ⅱ]

出生率の低下を、( )や( )、( )といった視点から考えれば、それは、将来働き手が減少し、同時に、国民の中の働き手の割合も低下することを意味します。働き手のことを「(① )」といいます。が、「(① )」の減少は、経済成長にとっては、大きなマイナス要因です。また、働き手の割合を「(② )」といいますけれども、「(② )」の低下は、現在問題となっている年金収支や、財政収支を一層悪化させることになります。したがって、「早急に少子化対策を( )、出生率の向上を図るべきだ」という主張についても、それなりにうなずけるところはあります。

問Ⅱ 松谷さんは出生率を図るべきだという主張について、どう考えているでしょうか？

[Ⅲ]－Ⅰ

しかし、私は出生率の低下にこだわりすぎるのも問題だと考えます。というのは、現在の日本においては人口の( )という、もっと大きな問題が急速に進行しているからです。これからの2・30年間、日本では( )が急速に増加し、( )が急速に減少します。先ほど、「出生率が低下すれば、将来の労働力人口が減少する」と言いましたが、これからの2・30年間における労働力人口の減少は、それとは比較にならないほど、急速かつ大幅なものなのです。

[Ⅲ]－Ⅱ

↓ { 経済に対する影響・・・成長率の低下、継続的なマイナス成長  
→( )の経済成長  
年金に対する影響・・・甚大  
問題点：経済や年金、財政における激変に対する準備が現時点で( )。

[Ⅲ]－Ⅲ

出生率の低下にこだわりすぎるもの問題だが、それは・・・

○ ( ) と思われるから。

さらにいえば、

○ ( ) と考えていないだろうか。↓

今、仮に出生率が上昇しても、日本が現に直面している問題は、何も解決されない。

#### [IV]

では、なぜ、この2・30年間に於いて、高齢者が急速に増加し、同時に労働力人口が急速に減少するのでしょうか。その理由は、( )と、その後に行われた大規模な( )にあります。つまり、高齢者が急増するのは、ベビーブームの世代、いわゆる( )が年をとって高齢者となるためです。そして、労働力人口が急変するのは、( )などによる産児制限の行われた世代が、変わって労働力の中核となるためです。そして、そうした高齢者の増加と労働力人口の減少が、いかに急速なものであると、われわれはその速度を変えることはできません。これから、生まれてくる人の問題ではなく、現にこの世に存在している人々の年齢構成からくる問題だからです。したがって、日本が直面する問題は、( )ではとても解決できないでしょう。高齢社会をみすえた、経済システム、社会システムの( )こそが求められているのです。

#### [V]— I

・抜本的な再構築とは？

- 企業経営…( )な経営手法 → ( )を基本とした新たな経営システム
- 財 政…増税 → 労働の減少にみあった( )が減少するシステム
- 年金改革…( )から、( )の所得の移転  
→ 賃貸住宅など社会的なストックの活用をあわせて考えると  
いったシステム

新システムには、発想の( )が必要。

問3 高齢社会をみすえたシステムの再構築には発想の転換が必要だといっていますが、あなたなら、どんな発想の転換をすすめますか。考えてください。

#### [V]— II

そして、そうした新たなシステムが開く未来は、決して暗い未来ではありません。( )は縮小しますが、( )も減少します。私の試算では、一人あたりの国民所得は、( )が維持されます。日本の一人あたり国民所得は、現時点で世界の最高水準にあるのですから、今後とも日本国民が世界有数の豊かな国民であることにはかわりはないのです。

#### [VI] — II

( )による労働力の人口 < ( )による労働力の人口

↑

2,30 年先までに経済社会システムの再構築が進めば、対応は容易になる。

## 【VI】 — II

ただし、システムの再構築はさまざまな( )を消滅させることになります。少子化対策の緊急性を主張する根底には、だから現在の経済社会システムを変えたくない、つまりは( )、という気持ちがありはしないでしょうか。( )と異なり、( )はまだ変化する余地があります。それを奇禍として少子化対策を主張している面があるとするれば、それはシステムの再構築にとって障害となりかねません。

## 【VII】

この点は、外国人労働者の活用という主張とも相通ずるところがあると考えます。仮に、外国人労働者の活用によって、現在の労働力水準を維持しようとするれば、今後の 25 年間で( )人も外国人労働者が必要となります。そのときの、外国人比率は、( )%以上と先進国にはまったく例をみない高さに達します。したがって、外国人労働者の活用によっても( )と、それに対応した( )を避けることはできないと考えるべきでしょう。それだけ、今後の高齢化の進展は著しいのです。わずかな出生率の変化に一喜一憂することなく、足元にある問題を正確に認識し、冷静な対処をもって未来を開くことを望みたいと思います。

### 【考えてみましょう】

- 1 システムの再構築によって既得権が消滅するといっていますが、どのような既得権が消滅すると思いますか？
- 2 高齢社会をみすえたシステムの再構築には「発想の転換」が必要です。あなたならどんな「発想の転換」をすすめますか？考えてみてください。

## 参考資料 ⑤ 日本人への提言

### 「学歴と生活と独立」

工学部〇〇学科1年  
〇〇（中国）

私は日本に来て、もう2年半になります。様々なアルバイトをしながら、日本人の仕事に対する気持ちも分かるようになりました。私が知り合った日本人たちは、ほとんど自分の人生を自分で決めていました。例えば、中学校を中退して、居酒屋でアルバイトして、今では社員から店長になった人もいます。また、ずっと勉強し大学院を卒業してから、さらに研究を続けている人もいますが、みな自分の気持ちを大事にして、将来を考えて生活しています。これは私にとってとても羨ましいことです。

中国の社会は、日本の社会より学歴に対する注目度が非常に高いのです。大学を卒業しても、会社に就職するのは大変難しいと思います。もし高校を中退すれば、就職はほとんど無理になりますし、生活のための仕事も探しにくいのです。中国での学歴と生活の関係は、水と魚の関係と同じだと思います。しかし、日本の社会では、高い学歴がなくても、頑張れば何らかの仕事でも暮らしていけると 생각합니다。その裏で、日本人の将来の生活に対する心配はほとんどないですから、当然エリートになるための頑張る気もないと思います。

先月の成人式のニュースから、いろいろな若い人の将来に対するメッセージを見ました。本当にびっくりしました。大人になったけど、そんな言葉が出たのは、とんでもないと思います。私は今の若い人の将来が心配になりました。日本社会の将来も心配になりました。多分、日本で成人になるのを20歳ではなく、いっそ30歳に変えるほうが良いと思います。

日本人に聞いてみたいこと：

日本の成人は20歳になることです。中国では18歳です。

成人=30歳という考えに対してどう思いますか？

参考資料 ⑥ 日本人への提言 「テーマと日本人に聞きたいこと」

	日本人への提言くテーマ>	日本人に聞きたいこと（ひとことで）	コメント数
A	学歴と生活と独立	日本は 20 歳、中国は 18 歳が成人です。成人＝30 歳という考えに対してどう思いますか。	9
B	集団で行動することは、いいことなのか	あなたは小さいグループで動きますか。個人で動きますか。	18
C	グローバル化の中の日本	あなたは、今の中国の現状に詳しいですか？機会があれば中国に行ってみようという気持ちがありますか。	7
D	「大人」という認識	両親を大切にしていますか？	4
E	日本人が NEET にならないための提言	自分の家族のためじゃなくても、自分のために若いうちから何かしたほうがいいと思いませんか？若いうちは 10～20 年しかないから、自分が将来後悔しないように慎重に考えてください。	4
F	これからの日本の成人の日	成人式だけでなく、成人になるまでの転換過程についてどう思いますか。	5
G	日本人へ 少子化対策についての提言	もう一つ提言がありますが、「できちゃった婚」の夫婦にお金を与えたらどうでしょうか？	4
H	子供を甘やかすな	子供のころ、甘やかされていましたか？	5
I	大人になりましょう	中国にどんなイメージを持っていますか。	8
J	日本の若者に	ごめんなさい。書いたことはきついかもしれないです。日本の小学校では道徳の授業がありますか？	14
K	苦しい労務輸入の中国人研修生	アルバイトとして所属が決まった研修生を雇用するのは違法行為ですが、その研修生を罰する前に、正式に彼らを雇用した雇用先の待遇や条件を改善するのが前提にあるべきで、ぜひ調整してほしいと思います。どう思いますか。	3
L	少子化問題について考えてみませんか	結婚するのは何歳ぐらいがいいか？	5
M	現在の日本で若者と子供に与えたよくない影響	日本人のみなさんにとってよくないと思う番組はありますか。それはどんな番組ですか。	6
N	目覚めよ、日本の若者、日本の責任者	私の意見についてみなさんどう思いますか？	4
O	日本人が少子化傾向を食い止めるため	少子化が進んできて、直接受けた影響にはどう対処したらいいと思いますか。	5
P	子育ては損だ？！	子供が何人いても、ひとりと経済的な負担が同じだったら子供を何人まで育てますか？	3
Q	ニートを増加させないための提言	ニートに対してどんなイメージを持っていますか	4
R	増加する NEET について	ニートはどんな感じがしますか？	5

参考資料 ⑦ 日本人のコメント例  
「日本人への提言」に対して

2005.3.12

○ △△さんの提言に関して

お名前 ( ○○○ )

○私のコメント

俗悪なテレビ番組が子供たちに悪い影響を与えるのは確かだと思います。番組内容が視聴率に左右されざるを得ないメディアでは、製作者の良心に期待するもの無理なのが現状です。

やはり、親の責任は大きいと思います。

○日本人に聞いてみたいことに関して

意味もなく笑ったりふざけたりするものとか、暴力シーンの多い映画とかいろいろあるようですが、私はそういうのを見ないので、具体的にはわかりません。

○提言以外に文を読んで感じたこと

表題…文の内容を考えると、表題を変えたほうが良いように思います。

「日本人への提言」に対して

2005.3.10

○ △さんの提言に関して

お名前 ( ○ )

○私のコメント

△さんの提言は論理的ですばらしいと思います。ただ、「老後の生活も年金があるので」という箇所について、少し補足したいことがあります。

現在の日本の年金は、△さんが予想しておられるほど高くはなく、それだけで生活しているのは大変です。(職種によっては、会社から年金が出る場合もある) 私の父親は72歳ですが、まだアルバイトをしています。

生活が苦しいのにもかかわらず、スネをかじらせて、子どもがNEETであることを容認する親までいます。これは、大変好ましくない現象だと思います。

もちろんそうだと思います。自分の人生を振り返っても、就職でも仕事でも遊びでも、精力的に動いた時は、結果が良くなくても後悔は残らないです。

○提言以外に文を読んで感じたこと

すばらしい文章を書かれるなと思いました。これからも、しっかり勉強なさってください。